様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年５月２８日現在

研究種目：特定領域研究
研究期間：2005～2009
課題番号：１７０８３０１１
研究課題名（和文）　宋代浙江の茶文化の研究―茶の湯文化の源流として

研究課題名（英文）　Study of Tea Drinking Culture in Zhejiang Region during the Song -as the Origin of the Japanese Way of Tea

研究代表者
高橋　忠彦（TAKAHASHI　TADAHIKO）
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：４０１２６１０７

研究成果の概要（和文）：唐から明にかけて、浙江を中心に展開した茶文化について、文献学、植物学、考古学など諸方面から、個別的研究と、それらを総合した学際的研究を行い、各時代の茶文化の実態と変遷について明らかにした。特に重要な発見は、唐の喫茶具の椀と甌に区別があったことと、日本に伝播した茶樹が遺伝子の特徴から浙江産であることが確認できたことである。また、中世日本へ伝播した茶文化と、その変化についても、具体的な解明を行った。

研究成果の概要（英文）：By interdisciplinary methods we clarified the history of tea culture in Zhe Jiang area from Tang to Ming,　Among many other points, we verified that two kinds of tea cups named　“wan” and “ou” are used for each purposes and had own peculiar shapes ,and that from the view of genetic research, tea trees transplanted in Japan are originated in Zhe Jiang. We also elucidated how the tea culture in Song Ear was transmuted into Japanese tea culture “Cha-no-yu” through the middle ages.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	4,600,000	0	4,600,000
２００６年度	4,600,000	0	4,600,000
２００７年度	4,600,000	0	4,600,000
２００８年度	4,600,000	0	4,600,000
２００９年度	4,600,000	0	4,600,000
総　計	23,000,000	0	23,000,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：喫茶文化、中国文学、物質文化、浙江、宋代文化、文人文化、　茶の湯、喫茶具

１．研究開始当初の背景

本研究は、特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成―寧波を焦点とする学際的創生」を構成する一つの班として、日本の伝統文化である「茶の湯」の源流となった、宋代の茶文化を研究の中心に据えたものである。それ以前の研究では、中世日本に伝播した茶文化（喫茶形態、茶器、茶樹などを含む総体として）の具体的な様相、また、日本の「茶の湯」文化形成にいたる過程に、不明な点が多かったため、このような研究が急務であった。

２．研究の目的

本研究は「宋代浙江の茶文化―茶の湯文化の源流として」を研究課題とし、唐から明にかけての、浙江を中心とした中国茶文化の形成と発展、その日本の茶文化形成への影響について、学際的な研究を広く行い、新知見を得ることを目的とした。

３．研究の方法

学際的な研究を進めることを中心課題とし、構成員の特質を生かして調査をすすめた。全体の統括は、中国茶文化史の高橋忠彦が行い、分担・連携研究者として、中国文学史の佐藤正光、茶樹栽培研究の山口聰、陶磁史研究の水上和則、さらに協力者として中世日本語史の高橋久子、浙江の茶文化・飲食文化の関剣平などが研究を推進した。

とはいえ、個別研究の上にたって、学際的総合が可能となるので、まず、以下の具体的な項目について、それぞれに研究を行った。

① 中国の各時代の喫茶文化を、文献学・考古学・絵画資料を駆使して、できる限り具体的に把握すること。

②日本に伝わった茶文化の位相を、中国茶文化史の中で位置づけること。その際、南宋の浙江の仏教文化を重視する。

③従来、茶樹の日本への伝播については、文献的な議論が中心であったが、遺伝子分析など、自然科学的な研究成果を取り入れて検討すること。

④日本の「茶の湯」文化形成の歴史を考える際にも、「茶の湯」につながる事項だけに注目するのでなく、鎌倉・室町の多様な茶文化の実像をとらえること。宋代文化の受容と保存と変質（日本化）といった視点が必要である。

これらの研究を発表し、討議する場として、各種の研究会を開催した。国内では、宋代茶文化研究会を七回にわたって開催した。茶文化班以外の発表・講演者は七名に及び、美術史、社会学の専門家や、ユーラシア各地の茶文化の専門家を含む。中国と日本の茶文化を多角的に考えることができた。

国外では、寧波で中日寧波茶文化研究会（2006）を開催し、杭州で国際ワークショップ「宋代の飲茶形式より見た中日文化の関係」（2008）、また浙江茶文化学術研究会（2010）を開催し、学術交流の場とした。こちらは、中国の研究者との交流を深め、今後の研究の基礎を築くことができた。

特に画期的な試みは、杭州中国茶葉研究所と共同で開催した国際ワークショップである。ここでは、唐宋明を代表する茶の実験的復元と品評を行い、その結果を分析することができた。

４．研究成果

以上の研究の成果は、各種の書籍、論文、研究発表の形で多くを公表しているが、一部については今後まとめて発表する予定である。個別的な成果は多数に上るが、特に有意義と思われる成果を次に記す。

(1)　学際的な研究成果

特に学際的な研究成果として挙げるべきは、論文④⑤⑮で発表した、盌（碗）と甌に関する分析である。唐代には盌と甌の二種類の喫茶容器が存在し、用途も別であったことが確認された。より具体的に言えば、盌は、100cc 程度の容器であり、唐の煎茶の茶会において茶を「連飲」（熱いうちに何杯も続けて飲むやり方）する場合に使用されたのに対し、甌は、300cc 程度の容器であり、唐の煎茶において生活の中で茶をゆっくり味わう場合に使用されたものと認められる。

この結論は、文献的研究と考古学的（陶磁史的）研究の双方を融合してはじめて得られたものである。つまり、『茶経』や茶詩など、唐代の文献を精密に読解することで、「盌と甌の両種の茶器が使用されていたこと」「盌は煎茶法で連飲するのに用いられた専用の道具であること」「甌は半升の容量であること」「一甌の茶をゆっくり味わう情景が詩に詠われていること」が確認される一方、出土文物を陶磁史的に検討すると、『茶経』の著述年代が、盌器形の初出年代に近く、甌の使用の終末期に当たることも確認され、それらを総合的に考察した結果である。従来このような論点を指摘した研究者は皆無である。

(2)　文献研究を中心とした研究成果

文献資料としては広い範囲のものを扱ったが、成果の明瞭なものは、以下に列挙するところである。

①『茶経』研究による唐代浙江の煎茶文化の研究については、論文①が重要である。これは、『茶経』のテキスト自体の問題を扱っており、原稿テキストに多くの問題が存することを指摘するが、これは、従来の中国茶文化史研究に、考え直すべき点があることを示す。このような研究を通じて、『茶経』に記される煎茶の具体的方法は、連飲における盌の使用方法を含め、画期的に明瞭になったものといえる。

②茶詩の分析による唐宋の茶文化の研究については、「唐宋茶詩訳注」①～⑤を作

成したが、これは単なる訳注でなく、各時代の茶文化の内容を解明するような詳注と解説がつけられている。いずれにせよ、茶文化から見た本格的な詩の読解自体、従来の学界には存在しなかったものである。論文⑱は陸羽と同時代の唐代の煎茶文化を、論文⑬は北宋期の完成した典型的な点茶文化を、論文⑩は北宋の点茶文化と煎茶文化の複合的な関係を、論文⑧は唐の煎茶文化の発展と変容をうかがう内容となっている。論文②は散文資料であり、②③を補足する内容を持つ。これ以外に、論文⑭⑰は、詩の表現と各時代の喫茶形態と美意識の関連を明確に分析したものである。

③茶書研究による唐から明に至る茶文化の研究としては、論文①⑪があり、浙江の茶文化の発展と形成を概観している。

④日本の文献による日中茶文化の関係については、論文⑦⑫があり、日本に導入された宋代茶文化の変容を分析した。ことに前者は、茶の異名の日本への導入と、日本に於ける独自な異名の創造を論じ、言語の面から日中双方の茶文化の交流の研究に、新たな視点を投げかけている。このような、室町時代の識字層が文献を通じて認識していた茶文化は、茶の湯と直接つながらないものであるとはいえ、今後重視すべき研究課題だと思われる。

⑤論文⑰は、茶詩研究を中心としながら、宋代の喫茶文化の複合性について、具体的に論じたものである。宋の茶文化は、唐を受け継ぐものの、新たな点茶文化を生み出し、「煎茶と点茶」、「団茶と葉茶」が併存した複合的な茶文化が発展した。そのような茶文化の一部として、浙江の「葉茶を点茶で飲む」文化が、寺院を通じて日本に伝播したのであるが、その複合的な様相を分析整理しようと試みたものである。

これらの文献中心の研究により、従来はきわめて漠然としたイメージした存在しなかった唐宋の茶文化について、喫茶方法、茶の美学、茶文化の地域性、茶文化の重層性等の具体的な様相が、相当程度明らかになったものといえよう。

(3)　茶樹栽培研究を中心とした研究成果

中国の茶樹の日本への伝播の過程を、植物学的方法を駆使して解明することにつとめた結果、日本緑茶の遺伝資源のルーツにあたる茶樹の集中する地域は、寧波から杭州にかけての天台系の寺院の集中する地域だと検証されつつある。この成果は、研究発表①として、中国全土の茶文化研究者を集めて発表され、注目を浴びている。この結果は、鎌倉時代に栄西や円爾が茶樹を伝えたという文献的な伝承を裏付けるものであり、学際的な研究成果ということもできよう。また、この研究は、照葉樹林文化論の再検証という意味もあり、論文⑨がこれにあたる。具体的な調査内容とその成果は以下の通りである。

元来、日本のチャのＤＮＡ配列が見つかる地域は、華中あたりである。中国では、生きた状態でのチャの木の国外持ち出しは禁止されていたが、中国側関係者の理解を深めた結果、現地茶園の調査、材料の交換などが進められるようになった。現地調査を効率化するために、遺伝様式の明らかな形質を対象として、表現形から特定の遺伝子頻度を推定する手法を主として用いた。予備的な試験から、従来育種の対象形質としては取り上げられることは無く、しかしながらチャの進化からは大変に重要な、雄しべの形質（雌しべが雄しべ群より長い、等）を調査し、あわせて、特異な形態のコーロ遺伝子についても調査した。これらはいずれも、日本の緑茶品種で首位を占める「やぶきた」の特性に関係する形質である。

現地調査の結果として、平水郊外の日鋳寺茶園において、コーロ型個体を発見した。また、短い雌しべの個体の頻度は、中国の他の産地よりは高い値を示した。顧渚では典型的なコーロ個体は目下のところ発見できなかった。また、短い雌しべの個体の頻度もかなり低かった。寧波郊外の天童寺後背山地て、宋代の中国と日本との貿易港である寧波に近く、宋代より伝わる茶生産地域、日鋳嶺（浙江省紹興市郊外）に残存している茶園についても調査を行った。また、中国農業科学院茶葉研究所国家遺伝資源保存園に収集されている、宋代著名産地からの収集系統についた、Rizhu、Guzhu、Xiushui Shuangjing の系統の雌しべ形質も、長く抽出するＥ型が優占したが、Guzhu では、短い雌しべのＩ型も見受けられた。Guzhu は比較的寧波からは杭州に近い地域であり、地理的な勾配も想定されるため、今後の精細な調査が必要である。

(4)　陶磁器研究を中心とした研究成果

唐宋の浙江茶文化に関連する陶磁器研究としては、窯址など多くの現地調査を行うと同時に、出土資料とその報告書、絵画資料などを総合的に分析した。図書③、論文③の成果があるほか、上述した盌と甌の違いに関する発見も、陶磁器研究をふまえてこそ、成果をあげたものである。それ以外にも、論文として未発表のものを含めて、以下の調査と研究を進め、それぞれ成果を挙げている。

①宋代に流行する点茶の具体的形態を確認するために、遼・金壁画墓の絵画と、宮中絵画につき、喫茶部分の比較を行った。点茶の準備段階である「練茶」が、喫茶器具との関連で、これらの資料から確認できる可能性が有るが、発表に至っていない。

②北宋中後期に浙江を中心とした江南地域で使用された茶碗について、研究を進めた結果、これの中心的存在は櫛描紋をもつ黄釉碗と推察される。その後の黒釉瓷碗(建盞・天目碗)との関係についても、合わせて研究を行っている。両者は平安・鎌倉時　代に起こる、武家社会での唐物茶器の収集品と深く関わる。
③浙江省の湾岸遺趾としての寧波和義路とその越窯青瓷出土品についての調査、江西省南豊白舎鎮窯とその青白瓷出土品調査、鉛山鎮丁家村盞窯里窯窯址と天目碗出土品調査、杭州臨安天目窯遺址と天目寺廃寺遺物の調査を行った。また、これらの内、茶器に関わる、国内での貿易品としての調査を行った。調査の詳細は未発表ではあるが、今後まとめて発表する予定である。これ等調査によって確実な貿易品移動の確証を得ることができたのは大きな成果といえよう

(5) 日本の喫茶文化の形成に関する研究成果

この方面に関しては、特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成―寧波を焦点とする学際的創生」全体の課題として取り組み、五山文化研究の一環として、五山文学研究を参照しつつ、研究を進めた。上述した論文⑦⑫の成果もふまえて、鎌倉から室町にいたる、茶文化の導入、展開と変貌について、以下の見通しを立てた。研究発表③がこれに関連するが、文章化は今後の予定である。

①鎌倉初期に本格的に導入された茶文化は、主に南宋浙江の寺院で行われた点茶であるが、はじめは、天台山羅漢供養茶のような宗教性の強いイメージを有していた。
②南北朝期から茶の世俗化と日本化が始まる。
③室町の日明貿易による唐物の蓄積が、後の「茶の湯」形成の源流となる。
④「茶の湯」の形成は、初期の宗教性（禅の伝統）への回帰意識と、唐物崇拝を維持しつつ、日本的な美意識に移行するという複雑な状況を考慮しなければならない。
⑤五山文学や、茶の大量の異名に示されるような、宋代文化の模倣による独自の茶文化も、室町時代には発展したが、直接「茶の湯」につながるものではなかった。
⑥最終的な「茶の湯」の完成は千利休個人の力によるものが多いと思われ、それ以前の伝統からだけ説明することはできない。
⑦「茶の湯」の形成が、同時代の中国（明）の浙江における、喫茶文化の展開と類似性があるのは無視できない要素である。
⑧全体として、日本の伝統文化としての「茶の湯」の形成は、外来文化の導入定着と保存（源流への回帰）、変質（日本化）という現象として見ることができる。

(6) その他の成果

東アジアの茶文化を考える基礎的資料として、生活文化語彙を扱った辞書もしくは語彙集の整理を行った。具体的な成果としては「東アジア語彙資料集成」を三点、すなわち、図書①③④を製作刊行したが、それぞれ 400 頁から 500 頁程度の大部ものであり、ベトナム、琉球、日本（室町時代）の、茶文化史研究・生活文化史に役立つ語彙を体系的にとらえうる資料であり、今後の東アジアの言語文化研究の基盤となるものである。この資料は、本特定領域研究関係者だけではなく、日本語学の研究者に広く配布したため、日本語史研究の分野に於いても、学界に裨益したものといえる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 30 件）

①高橋忠彦、『茶経』本文の再検討 ―字形類似による文字の混乱を中心にして―、東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅰ、査読無、第 60 集、2010、199－216
②高橋忠彦、佐藤正光、土屋裕史、唐宋茶詩訳注⑤蘇軾「葉嘉伝」他二篇の訳注、茶の湯文化学、査読無、16 号、2010、100－134
③水上和則、中国釉下彩磁釉的研究（上）、杭州文博、査読有、第８輯、2009、136－143、
④高橋忠彦、関於《茶経》中的“盌”和“甌”、飲食文化研究、査読有、2009（下）、2009、46－50
⑤水上和則、論《茶経》中的“盌”和“甌”的基本造形、飲食文化研究、査読有、2009（下）、2009、51－63
⑥山口　聰、作為照葉樹林文化要素的茶葉利用、飲食文化研究、査読有、2009（下）、2009、64－73
⑦高橋忠彦、高橋久子、『広本節用集』に見える茶の異名について、東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅰ、査読無、第 60 集、2009、331－361
⑧高橋忠彦、佐藤正光、土屋裕史、唐宋茶詩訳注④皮日休・陸亀蒙の茶詩、茶の湯文化学、査読無、15 号、2009、59－87
⑨山口　聰、照葉樹林文化論再考、ユーラシア農耕史、査読有、第四巻、2009、307－344
⑩高橋忠彦、佐藤正光、土屋裕史、唐宋茶詩訳注③蘇軾・蘇轍の茶詩、茶の湯文化学、

査読無、14 号、2008、208－231
⑪高橋忠彦、屠本畯の『茗笈』に見える茶文化、東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅰ、査読無、第 59 集、2008、207－231、
⑫高橋忠彦、『喫茶養生記』の初治本と再治本、アジア遊学、査読無、106 号、2008、36－43
⑬高橋忠彦、佐藤正光、土屋裕史、唐宋茶詩訳注②梅堯臣・欧陽修の茶詩、茶の湯文化学、査読無、13 号、2007、102－169、
⑭高橋忠彦、《雲脚・粥面・水痕》再考―茶書の用語と詩語の関わり、東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅰ第 58 集、査読無、2007、137－154
⑮水上和則、『茶経』に記された“碗”と“甌”の器形について、東アジア海域交流史　現地調査研究～地域・環境・心性～、査読有、第２号、2007、87－107
⑯山口　聰、アジアにおける茶樹利用の伝播、アジア遊学、査読無、88 号、2006、 62－72
⑰高橋忠彦、中国の喫茶の重層性―詩語と真実―、アジア遊学、査読無、88 号、2006、85－97
⑱高橋忠彦、佐藤正光、蘇明明、唐宋茶詩訳注①釈皎然の茶詩、茶の湯文化学、査読無、12 号、2006、88－122
⑲高橋忠彦、中国喫茶文化と茶書の系譜、東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅰ、査読無、第 57 集、2006、209－221、

〔学会発表〕（計 25 件）
①山口　聰、アジア茶樹の遺伝資源研究、浙江茶文化学術研討会、2010.3.6、浙江省杭州市新僑飯店会議室
②水上和則、臨安天目寺と天目窯窯址について、第７回宋代茶文化研究会、2009.12.12、東京学芸大学
③高橋忠彦、喫茶文化研究から見た五山文化、文化の翻訳・文化の複合―五山文化研究のさまざまな視点―、2009.3.7、東京学芸大学

〔図書〕（計 4 件）
①高橋久子編、東アジア語彙研究資料３運歩色葉集単語索引、古辞書研究会、2009、371 頁
②水上和則、茶文化史にそった中国茶碗の考古学、勉誠出版、2009、238 頁
③高橋忠彦、高橋久子編、東アジア語彙研究資料２琉球和名集―影印・翻字・索引・研究―、古辞書研究会、2008、461 頁
④古辞書研究会編、La Minh Hang 監修、東アジア語彙研究資料１大南国語―影印・翻字・解説・漢字索引―、古辞書研究会、2007、490 頁

６．研究組織

(1)研究代表者
高橋　忠彦（TAKAHASHI　TADAHIKO）
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：40126107

(2)研究分担者
佐藤　正光（SATO　MASAMITSU）
（2005 年度～2007 年度）
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：60272621

山口　聰（YAMAGUCHI　SATOSHI）
（2006 年度～2009 年度）
玉川大学・農学部・教授
研究者番号：20281753

水上　和則（MIZUKAMI　KAZUNORI）
（2006 年度～2007 年度）
専修大学・法学部・兼任講師
研究者番号：00418592

(3)連携研究者
佐藤　正光（SATO　MASAMITSU）
（2008 年度～2009 年度）
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：60272621

水上　和則（MIZUKAMI　KAZUNORI）
（2008 年度～2009 年度）
専修大学・法学部・兼任講師
研究者番号：00418592